

クラスへの参加者選びは慎重に
ハービー・ジャキンスの談話、バック・クリーク III にて
(アメリカ合衆国、ワシントン 1971 年)

わたしたちは深刻な問題を抱えている人を探しているわけではありません。そういう人たちはたくさんいて、はじめの 5 年間、わたしは同情心から、多くの時間を費やして、街角から人々を無理に引っ張り込もうとしたり、知り合いの親戚である病気の人たちのカウンセリングをしたりしました。助けが必要だという理由だけで……。でもうまくいきませんでした。わたしたちが最初に始めるべきなのは、少しの助けですぐに仲間を助けることができるようになる人たちからです。

基礎クラスで教えるときには、傷の深い人が一人二人はいても良いでしょう。他の参加者がそうした人々から学ぶことがあるからです。とくに、参加者は自分がそうした人々と同じだと気づくことができます。もし精神病院に行く機会があったなら、コウカカウンセリングの知識と技術をもっているあなたには、そこにいる人々があらゆる意味で自分と血を分けた兄弟姉妹であることが分かるでしょう。しかし、クラスの妨げとなるパターンは排除しなければなりません。常にまわりついている、「だれでもバカにする」パターンとか（どんなに頑張っても早くその影響を取り消そうとしても、クラスの進行を邪魔するから）、「みんなに注目してもらわないとだめ」というパターンも、コミュニケーションを妨げる大きな原因となります。クラスがうまくいくためにはこれらを排除しなければなりません。

つまり、賢い人々を相手にする必要があるということです。RC をやる人の多くは同情のパターンを持っています。学ぶことで、憐れな人、虐げられた人、惨めな人を助けたいと思っています。この教訓を得るのにわたしも苦しい道を通ってきました。座り込んで何時間も泣き続けたものです。オレはなんとひどい奴だ、金を持っていないというだけでこの人のことをクライアントとして引き受けないなんて。騒ぎを起こしたからといって……。他のクライアントの財布を盗んだくらいで……。などなど。まるで自分が大金持ちか有力人物にでもなったかのように感じて、何時間も何時間も泣きました。そんな立場から逃げ出したいと思ったからです。

わたしたちが手を差し伸べたときにはもう手遅れという人々は少なくありません。それは仕方ありません。わたしたちが気づかないでいる身近な十二人に対して義務がないのと同じように、目の前にいる一人に対しても義務はないのです。まず賢い人々に手を差し伸べることが先決で、その後速やかに、そうでない人々を助ける有効な方策を練っていかなければなりません。そうした人々に対するわたしたちの「知性的な」関心は決してなくなることはないのですから。

Screening for RC classes

プレゼントタイム 2006年10月号 77 ページより

Harvey Jackins

訳：早坂文彦

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります（翻訳2007年。原文1971年）。

この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。